

にして茅針といふもの即是也、或人の説に茅をチといふは其赤色なるが血の如くなるが故也、
 後には、茅に、海といふ是也、また神武天皇の兄宇迦斯を斬給ひし地を、宇陀之血原といふとも見え、
 茅とよぶ所の同じければ、血といふ名を嫌ひて、後に茅の字を用ひしも知るべからず、血による
 見えふ也、こいふ事、其徴とすべし、草をカヤと讀み、万葉集ひしと見えし如きは、草といふ
 者、初て生じたり、カヤといふに、既にそれれり、思はれず、
 倭訓栞前編十五、ち○中 茅をよむも神代紀にみえ、倭名抄同じ、千の義多くあつまり生ずるを
 いふ成べし、

〔日本釋名〕茅花 ちはな也、つとちと通ず、ちはらがや也、ちがやとは血のいろの如く赤きゆへ
 也、かやとはかりてやねをふくなり、又つばなを尾花とも云、けだもの、尾の如し、

〔萬葉集〕春八相聞 紀女郎贈大伴宿禰家持歌二首
 戯奴ワケ和氣ニ之爲ガ吾手ワ母須モ麻爾マ春野爾ハルノ拔流ハ茅花チ會ツ御食ミケ而シテ肥座ヒマ首略一
 右折攀合歡花并茅花贈也

大伴家持贈和歌二首

吾君爾ワガキニ戯奴ワケ者戀ハ良思コトヲ給有タマヒ茅花チ乎ナ雖シ喫ク彌ミ瘦爾シマ夜須ヨス首略一

〔嬉遊笑覽〕草木 茅花をゐなかの童部はつみて食ふ、古へは是をくへば肥とて大人もくひたり、

万葉 紀の女郎が家持と贈答に、○中 本草にも益小兒といへり、○註 五元集やせたうてつば
 なも食はぬ花盛と付句あり、

〔枕草子〕草は

つばないとをかし、はまちの葉はましておかし、○中 あさぢ

〔萬葉集〕十六 有由縁井雜歌 怕物歌三首